

# 諜報の天才 杉原千畝



ちうね  
タイトル 諜報の天才 杉原千畝  
著者 白石仁章  
出版社 新潮新書 新潮社  
発売日 2011年2月25日  
ページ数 213p

杉原千畝といえば世界中のユダヤ人から「日本のシンドラー」と呼ばれて、今日、国際的に高く評価されている元外交官です。

映画「シンドラーのリスト」(Schindler's List)は、私も見ましたが、[スティーブン・スピルバーグ](#)監督による1993年のアメリカ映画です。第2次世界大戦時のナチス・ドイツによるユダヤ人の虐殺(ホロコースト)の中、ドイツ人実業家オスカー・シンドラーが1,100人以上ものユダヤ人の命を救った実話を描いています。ホロコーストに関する映画の代表的作品として知られています。

この当時、杉原はリトアニアの日本領事代理をしており、領事館の周囲にたくさんのユダヤ系避難民が、ナチスの迫害から逃れるために、日本の「通過ビザ」を求めて杉原のもとに押し掛けてきます。行先国の入国に関しては、「キュラソー・ヴィザ」でしたが、当時のユダヤ人たちの逃げ場はオランダの海外植民地であったカリブ海の小島「キュラソー」および南アメリカ北東部の「[スリナム](#)」でした。しかし、ここに行くためにはソ連、日本を通過する以外に道はありませんでした。

この時、日本とドイツは同盟関係で、ユダヤ人を助ければドイツに対する裏切り行為でした。杉原はヴィザ発行の許可を得るために日本の外務省に電報を打ちますが返事がありません。何度も何度も打った結果、やっと返ってきた答えは「ノー」でした。

そこで、杉原は「自分の一存で彼らを救おう。そのために処罰を受けても仕方ない。人間としての信念を貫かなければ」と決心します。ユダヤ人へのヴィザ発給によって約6000人もの尊い命をナチス・ドイツの迫害から救った外交官です。ここまでは、私の知っている杉原千畝です。本書の目次でいうと、第6章あたりに書いてあります。

何が書かれているかを知るために、少し目次をみてみましょう。

## 目次

### プロローグ

第1章 インテリジェンス・オフィサー誕生す

第2章 満州国外交部と北満鉄道譲渡交渉

第3章 ソ連入国拒否という謎

第4章 バルト海のほとりへ

第5章 リトアニア諜報網

第6章 「命のヴィザ」の謎に迫る

第7章 凄腕外交官の真骨頂

### エピローグ

おわりに

杉原はヴィザ発給について、決して自ら語ろうともしませんでした。彼に命を救われた元避難民たちは、是非お礼をしたいとの一念から戦後彼の行方を探し続けます。元避難民の一人、ヨホシュア・ニシュリ氏がイスラエルの外交官として来日し、当時貿易会社に勤めていた杉原と再開したのは、1968年、ヴィザ発給から30年近い後だったそうです。

翌年、イスラエルに招待された杉原に同国政府より勲章が贈られます。その時になって、元避難民たちは、「ビザ発給は杉原の独断であった」ことを初めて知ります。彼らの杉原に対する感謝の念は一層高まり、ホロコーストの惨劇に抗してユダヤ人を命がけで救った人にのみ贈られる「諸国民の中の正義の人」（この勲章には、「一人の命を救う者が全世界を救う」と記されているそうです）の称号が1985年、杉原85歳の時に贈られています。日本人でこの称号を贈られた人物は、今日まで杉原だけだそうです。

さて、本書では「ヒューマニスト」としての杉原と「インテリジェンス・オフィサー」として、諜報活動で高い能力を発揮した杉原のもう一つの顔に焦点を当てています。外務省外交史料館に勤務する著者ならではの、豊富な史料を用いた優れた成果です。

インテリジェンス・オフィサーとは、「情報ないしは諜報活動に携わる者」をいいます。日本では一般的に「諜報者」というと「スパイ」と同じに扱われ、「007のジェームス・ボンド」を想像しますが、真のインテリジェンスの活動は、「地道に情報網を構築し、その網にかかった情報を精査して、未来を予測していく、そしてさらに一歩踏み込んで、予想される未来において最善な道を模索する」というのがインテリジェンスの活動です。

**手嶋氏**は、優秀なインテリジェンス・オフィサーを「耳の長いウサギ」に例えています。まさに至言で、ウサギのように機敏で、決して暴力的ではなく、長い耳、すなわち広い範囲に情報網をめぐらすことこそがインテリジェンスの基本だと言っています。つ

まり、地道で、気の遠くなるほどの忍耐力を必要とする、それがインテリジェンス活動だということです。

第2章に出てくる、ソ連との北満鉄道譲渡交渉こそ、インテリジェンス・オフィサー杉原の名声を一躍高めた重大交渉でした。ここで杉原は白系ロシア人(ロシア革命後、ハルビンにはソ連政権を好まないロシア人、革命の赤に対して白ということで白系ロシア人と呼ばれる人々が多く居住していた)を中心としたネットワークを利用して北満鉄道の内部事情を調べ上げ、最終的にソ連側は、最初の要求額の1/5で、日本側に譲ることに合意しています。杉原の北満鉄道で展開したインテリジェンス活動は、鉄道の価格を大幅に引き下げることとまらず、ソ連側の情報をどのようなルートで入手していたか推測も出来ないほど巧みなものだったといえます。

ハイライトは、「第3章 ソ連入国拒否という謎」です。1936年末に、在モスクワ日本大使館に二等通訳官として勤務の発令があり、入国ヴィザを申請したところ、理由を明らかにせず拒否されたという事件がありました。

著者の勤務先が所蔵している「杉原通訳官ノ白系露人接触事情」という調書(じつは杉原本人が執筆)の謎解きにわくわくしますが、二等通訳官という低い地位のスタッフに「ペルソナ・ノン・グラータ」(*Persona non grata* とは、外交用語の一つで、ラテン語で「好ましからざる人物」の意)とは大げさな! という異例の措置に日本側も食い下がり、理由を執拗に問い質します。これに対する日本側の報復措置が、ついには日ソの外交官ヴィザ発給拒否合戦にまで発展するのです。

前記北満鉄道譲渡交渉の成功は、ソ連側に杉原の恐ろしさを思い知らせることにとなり、「国際慣例上先例がない」入国拒否という手段に訴えさせることになってしまいました。後に、何千枚もの日本通過のヴィザを発給して、多くのユダヤ系避難民を救った杉原本人が、自身への1枚の入国ヴィザを得ることが出来ずに苦しんだとは、あまりにも皮肉ですね。

在モスクワ日本大使館に二等通訳官として勤務が駄目になり、1938年8月にやっと杉原の赴任先が決まります。新設の在フィンランド公使館二等通訳官に任ぜられます。フィンランド在勤時の杉原に関して、クラシック音楽ファンには垂涎の話が残っています。フィンランドが生んだ偉大な音楽家ヤン・シベリウスに会う機会に恵まれ、しかもサイン入りのポートレートと、フィンランド人が愛してやまない名曲、交響詩「フィンランディア」のレコードをもらったということです。羨ましい限りですね。

ソ連は、フィンランドに対しカレリア地峡を含む重要地の割譲を要求します。杉原が会う機会に恵まれたシベリウスが、名曲「カレリア組曲」を作曲したように、フィンランド人にとって思い入れ深い地域です。フィンランド政府は、戦争になる危険を承知で、この要求を拒否し、1939年ソ連・フィンランド間に戦端が開かれます。

本書は、ハルビン総領事館時代以来の外交官杉原の軌跡を追い、彼のたぐいまれな語学力(英語、ドイツ語、ロシア語、フランス語など)と情報収集能力に注目します。その杉原は、戦争前夜のリトアニアのカウナス(ヨーロッパのカサブランカのような街。宗教はカトリックで、カトリック信仰に根差した生活習慣の近さは、ポーランドの情報将校たちが紛れ込むために有利に働いたといわれています)に赴任します。そこは、「世界的な諜報戦の主要舞台」でした。というのも、諜報活動の拠点としての最適地は、敵国に近い中立国だからです。そこで領事代理に就いた杉原は、ユダヤ人を含めポーランドから亡命した多くの人々と交流します。杉原にとって、ポーランド系ユダヤ人との交流も「命のヴィザ」の発給も、ともに旺盛な情報収集活動の帰結でもあったといわれています。

その後、ドイツ領ケーニヒスベルク領事館に移った杉原は、自らの情報網を活用し独ソ開戦についての貴重な情報を入手しますが、本国政府では、対独友好の空気からこの報告は無視され、日本外交はナチス・ドイツへの依存を強める運命となります。著者はそこにインテリジェンス・オフィサーとしての杉原の「無念」を感じとっています。

杉原が発給した 2139 通のヴィザ(1枚のヴィザで家族全員の渡航も可能だったので、救われた人数は約 6000 名とされている)はヒューマニズムの物差しでは実像が見えてきません。全欧に張り巡らされたユダヤ系の情報網は、「命のヴィザ」と引き換えに第一級の機密情報を差し出していたのだ、と著者は喝破しています。

私が住む敦賀市も、杉原千畝とは縁があり、ロシア革命が起きた時、危険分子と目されたポーランド人に対する虐殺が頻発し、その結果、孤児となった多数の児童が生命の危機にさらされました。この時、事態を憂慮したウラジオストック在住のポーランド人達は、児童救済委員会を組織して各国に救援を要請します。日本に対しても救援を要請し、外務省、陸海軍、内務省の迅速な連携により、孤児たちはウラジオストックから日本船に乗り、福井県の敦賀港に上陸します。この救済活動では、合計 765 人の児童たちが救われたそうです。それから、約 20 年後、杉原千畝からヴィザを発給された避難民たちの大部分が上陸した港も敦賀でした。

現在、この2つの出来事を記念して、「人道の港 敦賀ムゼウム」(「ムゼウム」はポーランド語で博物館「Museum」)が開設され、内外の多くの人々が訪問しています。

反ユダヤ思想は、ナチスの専売特許ではなく、帝政ロシア時代からソ連も反ユダヤ思想が強い国だったことが、この時代をさらに複雑なものにしていたようです。そういう意味で、杉原は、広義の意味では確かに「ナチスの手からユダヤ人を救った」ともいえるが、狭義にはむしろ「スターリンの脅威から守った」というべきであると著者は述べています。

一つよく判らないのは、杉原によるユダヤ避難民への日本通過ヴィザ大量発給が

日本国内では問題視されていたにも関わらず、実際には杉原は何ら罰せられることはなかったと言われています。時代がインテリジェンス・オフィサー杉原の能力を必要としていたためだろうと著者は言いますが、軍も関係しているだけにそれだけで済んだのでしょうか。第7章を読むと、消化不良を起こしそうです。

本書には、日本国民なら誰でも知っている第2次世界大戦の頃活躍した著名な政治家や外交官たちが出てきて、杉原千畝がどのような政治的位置にいたのかを垣間見ることができます。

著者は「プロローグ」で若い世代に読んでほしい」と書いていましたが、読み終えてみると、「中年や熟年の読者へのエール」にもなっていることが分かります。著者の杉原千畝への愛情と、歴史家(外交史)としての真摯な記述が結びついた良書です。お勧めの書です。

2011. 4. 21

---